

農村舞台の新しい発展

会長 大和武生

阿波農村舞台の会の発足以来、県内外の多くの人々に支えられ、当初の予想を越える大きな成果を挙げることが出来たと自負しています。

江戸時代末期から明治初年にかけて、阿波の人々は自己表現の場として農村舞台を建設してきました。村人たちは、みんなで協力しあい、お互いに建材や資金を持ち寄り、そして技術と労力を提供しあって「農村舞台」（当時は一般に「定舞台」という、ただ単に「舞台」とだけ呼ぶことも多かった。）という村人の「憩いの場」を作りあげました。そこは、江戸時代の庄屋さんや明治以来の村長さんから干渉されることのない「村人の憩いの場」でありました。

農民たちの共同作業であった入会地の草刈り、川浚え、村道の道直しなどの段取りや割当を舞台に集まって公平に定め、そして作業の終了後には食べ物やお酒を持ち寄って慰労会をしました。豊作の年の秋祭りには、淡路島の人形座を呼んで浄瑠璃芝居を楽しみました。不作の年には自村や近隣の村に存在する素人座の人形芝居を楽しみ、幕間には村人自身によるのど自慢や踊りの披露が行われたことでしょう。農村舞台は、村人たちが嬉しいとき慰めあわなければならぬときなど、気兼ねなく集まれる唯一の「村民ホール」的存在でした。

村人たちが農村舞台に集まらなくなつたのは、村の平和な暮らしが外国との大戦によって押し流されるようになった昭和の中ごろからだろうと思われまふ。村から若者や働き盛りの元氣なお父さんが出征軍人として戦場に駆り出されるようになる、**「村の名譽」**として小学校の校庭で官製の壮行会が開かれるようになりました。また戦争を宣伝する映画は、小学校の講堂や町の商業映画館で華々しく上映されるようになり、長閑な舞台とは縁遠くなりました。

戦争が終わってからは、一時的に農村舞台が村人たちの活動の場として復活したことがありました。しかしそれは僅かな間で、次の時代に現れた商業主義的な大型スクリーンを装備した映画館、またごく稀に地方興行に訪れるプロ劇団の演劇を演ずる町の大劇場に、その役割を奪われてしまいました。

そして、日常的には日々テレビから流されるわざとらしい娯楽番組に、日本人の本來持っていた健全な娯楽神経が脅かされるようになったのが昨今の現状といえるでしょう。

平成になってから、私たちの会が農村舞台の復活を提起して大きな反響を得ることが出来ました。これは、徳島県の人々が江戸時代から持っていた健全な芸能観の復活を意味するものでないだろうかと思ひます。

農村舞台が生きて活動するためには、世の中が平和であること、住民の自主性が活かされていること、そして舞台

と観客席が芸術的共感によって結びつけられることの三つの条件が必要であるように思ひます。

いま徳島県では、長く伝統を守ってきた犬飼の農村舞台では、その地でしか見られない個性のある舞台の雰囲気を感じさせます。江戸時代以来、養われてきた豊かな芸術性と感受性を実感させてくれます。共通して感じられるのは、与えられた既成のものでない、自分たちだけの遊び、喜びをみんなで楽しもうとする氣風です。

今後も、阿波の農村舞台は住民の自主的な表現の場として活かされ続けるべきだし、舞台と観客とが一体になって楽しみあう世界であるべきだと思います。



拝宮谷農村舞台保存会による「えびす舞」練習風景

もちろん、阿波の農村舞台は人形芝居用に設計されたものですから、古典的な浄瑠璃や新作浄瑠璃を演ずることに便利に出来ていますが、浄瑠璃に限定せず、その外の芝居、歌謡大会、手品など多種多様な試みが可能だし必要でしょう。住民の自主性を最大限に掘り起こし、すでに評価の定まった「与えられた芸能」でない、自分たちの中にある観てみたい芸能、自分で演じたい舞台を、住民を主体にして作り出してゆくことが今後の農村舞台の発展への鍵になるのではないのでしょうか。



拝宮谷農村舞台保存会による「えびす舞」本番

農村舞台が今に伝えるものは

(株)絹や 山田明弘

「文化と産業が両立するような、仕組みや製品を開発しよう」「そのために徳島の文様(デザイン)を見つけ、それをシンボルにしよう」「そうしないと、歴史や文化・風土などの背景を持つていないものは、いくら発現をしても存在感が希薄で人に伝わらないはずだ」

そういつて探し始めた徳島の文様。仕事ながら和装品を扱っている、染織の図案などから探すと見つかるのではないかと考えたのが一年前。それが甘かった。徳島は原材料を中心とする産業は大いに栄えたのですが、表現をするソフト産業があまり発達しなかったこともあり、デザインに関する資料が少なく、歴史や美術の観点から探したけど一向に見つからないのです。行き詰まりを感じて八ヶ月が過ぎようとした時、視点を変え工芸の方から探してみようと、工業技術センターを訪ね見つけたのが、大寺喜好氏が持っていた資料でした。氏は木工芸品を民

藝の域まで高めようと努力された方で、その資料は木工藝にはじまり建築・仏像・徳島の歴史など幅広分野に及んでおり、その資料の中の一冊が「阿波の農村舞台」でした。

話は変わりますが、私は昭和三十一年生まれで子供の頃は、世の中の技術が変化し、経済が成長していました。大人になった二十一世紀には科学が発達した素晴らしい世界になると、子供心にもなんだか未来に対してワクワクした気持ちを

持ったものです。

実際その二十一世紀に入って、あの頃思った未来はあっただろうか、希望は現実となっただろうか、また今の子供たちは未来に希望を持つているだろうか。そう考える時、何かそれ以上に無くしたものが多かったような気がします。

無くしたものは何だったか。私たちの生活を取り巻く環境は劇的に変わりコミユニティーといわれる「つながり」がごとごと寸断されました。このつながりは、人々が共に生きていく知恵であり、広い意味では自治であり、地域の人たちが助け合いながら生きていくシステムでもあったように思ひます。

農村舞台を見た時、無くしたものの正体が、山深いお宮の境内で埋もれかけた姿で、ひよっこり私たちの前に現れたような気がしたのは私だけでしょうか。

農村舞台をとおして見えてくる価値の一つに、無名性があるように思ひます。名も無き多くの人が担っていた無名により、逆にその人たちが担ったものがクロ一ズアップされて見えてくるのです。

では、彼らが担っていたものは何か。それは、複合的に成り立っていた地域の共同体です。これを言葉に置き換えると、地域や時代などで違いはありますが、座・結・連・講・組・惣と呼ばれていたものです。

この先人たちが築き上げた共に生きる知恵を再評価し、伝えていくことが出来

れば、豊かさとは何かを問い直すきっかけとなり、時代にあった新しい結や惣、講などの共同体をつくることのできるのではないかと、そう思ふのです。なぜなら、今日の人々が抱えている問題の多くは、この、そんなにも昔でないありふれた営みが生きていけば、何とかかなりそうな気がするからです。

またもう一方の側面は、農村舞台が存在した時の流れの中に、芸能・歴史・文化・コミユニティーなどが多層に積み重なった価値として成り立っているところ。この生活のスタイルや考え方のそのものが、私たちの歴史や文化・風土の成り立ちであり、私たちが発現していくものそのものではないでしょうか。

一冊の本から始まった農村舞台との出会い。それは、徳島そして日本人の生活様式や文化、心のあり方を再び考えさせてくれることになりました。当初の目的であった、文化と産業が両立するような仕組みをつくること、それが農村舞台を通して実現できるのではないかと。そんなほのかな期待が芽生えています。

●参考資料として

座・結・連・講・組・惣
それらの呼び名は地域や時代によって違いはあるが、ここで言う村の組織を中心を話せば、生産のための集団である村は、あらゆる相互扶助を目的にした組織だといってもいいだろう。しかしそれは弱い者を助けるための強い者の集団といった意味ではなく、おのおのがよりよく、より効率的に生きていくために、金銭を介さない主体的な相互協力、相互扶助を伝統としてきた組織、という意味もある。たとえば臨時の相互扶助である結や、恒



法市農村舞台公演

常的にそのための組織化されている講はモヤイともスケとも合力とも呼び、様々な協力や扶助を行った。

屋根の葺き替えだけでなく、道普請、用水の保全や掃除、宮の掃除、火災・洪水の際の出勤、風呂を振る舞う結風呂、食事を振る舞う結、火事の時隣村から駆けつける見舞い人足、〈不幸組〉〈無常講〉〈同行〉などと呼ばれる葬式の実施、婚礼の儀式、そして〈出世無尽〉と呼ばれるものは孤児の救済にあてるものだった。講脇・脇親と称する発起人がたち援助を募って孤児を育てていくのである。その他に障害者の受け入れ組織、借金を背負った人間の再起を図る〈御介抱山〉...などがあつた。